

トマス・ウェイドと北京語の勝利

高田時雄

一、官話の南北

今日でこそ、北方官話、西北官話、西南官話、下江官話というような方言學上の分類が一般に行われているけれども¹、そのむかし官話といえ、官員たちの話すことばを指す、きわめて漠然とした呼稱であった。その意味ではただ一種の官話しか存在しなかったといってもよい。その規範となったものは、これもかなり荒っぽい判断に基づいてはいるものの、南京のことばであった。この認識は、明末のカトリック宣教師以來、ヨーロッパ人の間に廣く浸透していたし、日本においても同様に理解されていた。官員中に占める南人の割合は、明清を通じ一貫して大きいものがあつたから、官話といえ、入聲を保存する五聲體系のそれが優勢であつたことは理解しやすい。しかし明代においても、都である北京の言語の勢力はすでに否定しがたく、着實に影響力を増しつつあつた。とくに清朝に入ると、當然ながら旗人の官途に就くものが多くなり、官話中に旗人語の影響が見られるようになる。雍正の上諭に觸發されて廣東・福建に出現した官話學習書には、これら旗人の用いる官話の影が明かである²。かくして、官話に南北の二種が存在することが認知されるようになり、「南北正音」とか「南北官話」といった表現も行われるようになった³

十九世紀以前、廣東で貿易を行っていたヨーロッパ諸國の商人たちは、中國語の學習にさほど熱心ではなかつたし、そもそも北京の朝廷は外國人に對し中國語を教えることを禁じていた。しかし一八〇七年、ロバート・モリソンがマカオに來たり、プロテスタントの布教活動を開始した頃から、ヨーロッパ人による中國語研究は新しい局面を迎えることとなつた。プロテスタント・ミッションの宣教師は、聖書の中國語譯をその事業の中心に据えており、その基礎として熱心な言語研究を開始したのである。さらにアヘン戦争と、つづく南京條約の締結により、中國をを目指す歐米人の數は急速に増加していく。それにつれて中國語の辭書、文法、學習書の類が續々と生み出されてくる。

¹官話方言を最初に分類したのは恐らくエドキンスで、彼は官話を、南、北、西の三種に分け、それぞれの標準を南京、北京、成都としている。Joseph Edkins, *Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect*, Shanghai, 1857.

²このあたりの事情は、かつて大まかに述べたことがある。拙文「清代官話の資料について」、『東方學會創立五十周年記念東方學論集』(1997)、pp.771-784を参照。

³「南北正音」の名稱はかなり早く萬曆乙未(1595)の『訓釋南北正音』に見え、「南北官話」は例えば嘉慶庚辰(1820)重刻の張玉成『南北官話彙編大全』(封面題)に見える。

そういった著者たちの南北官話に対する態度には、なかなか微妙なものがあるが、二つの官話の存在を認める点では一致している⁴。明末のカトリック宣教師が南京の官話を唯一の標準とする場合とは、明らかに時代背景が異なるというべきであろう。二つの官話の対峙する中で、外国人にとって学習の対象に選ぶべき標準的な中国語はいったい何れであるのかを規定することが先ず何よりも望まれていたが、それはまた非常に困難な事柄でもあった。ウェイドが登場するのは、こういった時期である。

二、ウェイドの登場

トマス・ウェイドの一生はアヘン戦争以後のイギリス中国外交の歴史そのものであったとも言い得る。また彼の中国語に対する見解は、その外交官としての履歴と密接不可分である。簡単に彼の生涯を振り返ってみよう。

トマス・フランシス・ウェイド (Thomas Francis Wade, 1818?-1895) は、一八四二年、アヘン戦争末期に投入された第 98 連隊の士官として中国にやって来る。もともと外国語の学習に興味のあったウェイドは、輸送船の中でひとり熱心に中国語を勉強し、1842 年 6 月 2 日香港に到着したとき、連隊長は彼を連隊の通譯に任命したほどであったという。その後、健康を害したウェイドは、療養のため一旦イギリスに戻るが、1845 年半ば、中国に戻ったウェイドは、突如軍役を退くことを決める。イギリスの中国全權デーヴィス (Sir John Francis Davis, 1795-1890) が、年俸 100 ポンドの見習い通譯の職を呉れたからである。この時からウェイドと中国語との職業的な結びつきが始まる。翌 1846 年、デーヴィスはウェイドを香港高等法院の定員外通譯に昇進させる。1848 年、デーヴィスの後任となったボーナム (Sir Samuel Bohnam, 1803-1863) とともに良好な関係を保ち、ウェイドは一等通譯に昇進するとともに、中国書記官代理に併任されるという順調なスタートを切った。この時期、ウェイドは 1947 年に中国語教師として應龍田を雇い入れている。この人物がウェイドの中国語に決定的な影響を與えることになるが、それについては後で述べよう。

1852 年の初めまでボーナムの下で働いたウェイドは、マラリアの加療のためイギリスに一時歸國する。その際、ウェイドは、中国語の学習を繼續するために、應龍田をロンドンに伴っている。回復した頃、ボーナムがウェイド

⁴“The pronunciation of the court, called in Europe the Mandarin Tongue (in Chinese官話 *Kwan hwa* Public officer’s dialect) and which is spoken by public officers and persons of education in every part of the Empire, is different from the dialect of each Province; the Provinces moreover differ amongst themselves. The dialect of Macao is different from that of Canton, and the mandarin dialect of Nanking is different from that of Peking.” (R. Morrison, *Grammar of the Chinese Language*, Serampore, 1815, p.3.; “The Mandarin Dialect is divided into the 北話 Peh hwá, northern language, and the 南話, southern language or dialect...the dialects spoken at Peking and Nanking respectively regarded as the standards of authority of the mandarin.” (W. Lobscheid, *English and Chinese Dictionary*, Hongkong, 1866, p.30.; “In this wide area, the Nanking, called 南官話 and 正音 or true pronunciation, is probably the most used, and described as 通行的話, or the speech everywhere understood. The Peking, however, also known as 北官話 or 京話 is now most fashionable and courtly, and like the English spoken in London, or the French in Paris, is regarded as the accredited court language of the empire”. (S. Wells Williams, *A Syllabic Dictionary of the Chinese Language*, Shanghai, 1874, p. xxxii.

のために、上海副領事の地位を用意してくれたので、その知らせを受けると、ウェイドは勇躍、船に乗り込み、1853年7月初、上海に着任した。その時の上司はラザフォード・オールコック（Sir Rutherford Alcock, 1809-1897）である。ウェイドはかなり早い時期から、中國外交の鍵は、軍艦による威嚇ではなくて、互いの文化の理解の上に築かれねばならないという考えを持っていたが、この頃、イギリスの在中國外交團の言語教育についてのプロジェクトをしきりに主張するようになる。当時、中國にやって来る若い見習い通譯たちの言語能力はかなり悲觀的なものであった。十分な教本も存在していなかったし、組織的な教育體制も確立されてはいなかったからである。上海の職を辭し、香港に歸っていたウェイドは見習い通譯の試験を行った。その結論として、ウェイドは以下のような中國語通譯教育計畫を立案し、外務省に進言する。最初の年は、學生を香港に集めて、中國語と中國文化を集中的に學習させる。有能な現地人教師と、十分な教材の經費に對する經費は、外務省が負擔すべきである。また言語と文化の學習以外の仕事は最小限に止めるべきである。年末に試験を行い、成績優秀者は、條約港で假のポストを與え、一年間、經驗ある通譯について實地研修をさせる。今日から見れば、きわめて合理的かつ當然の提案であるが、當時のイギリス政府はこれを認めなかった。またウェイド自身も一層多忙な仕事に追われ、それに固執しているわけにはいなくなる。1857年の7月半ば、アロー號事件の收拾のために、前月から到着していたエルギン卿の要請によって、その通譯兼中國問題特別顧問となったからである。見習い通譯の教育問題は、自然、棚上げになった。

廣東を占領した英佛連合軍は、艦隊を北上させて天津まで至り、1858年6月26日、天津條約が締結された。これによりようやく北京に公使駐在權が確立されたかに見えた。1842年の南京條約は、條約港を開港させたけれども、歐米外交團が北京と直接交渉を持ち得る手だてはなお存在せず、外交交渉の舞臺は相変わらず廣州にあったため、イギリスをはじめ諸外國にとって、北京に公使を駐在させ中國と本格的な外交關係に入ることが差し迫った課題であった。しかし1859年6月、大沽砲臺事件をきっかけとして新たな戰端が開かれ、エルギンによる翌年の圓明園焼き討ちなどを経て、1860年10月、清朝は都北京での條約締結を餘儀なくされるに至るのである。

この間、1859年4月、フレデリック・ブルース（Sir Frederick William Adolphus Bruce, 1814-1867）が全權公使になると、ウェイドは中國擔當書記官に任命される。そして1861年初め、條約後の交渉のため北京に赴き、その後6年近いあいだこの地に留まり、1864年からは代理公使（chargé d'affaires）も勤めた。この時期、多忙な仕事の餘暇を縫って、59年に『尋津録』を香港で、翌60年には上海で『問答篇』『登瀛篇』を出版する。しかし1861年の8月末、年來の主張であった中國語通譯の教育改革にゴーサインが出た時、ウェイドはその言語教本を完成させるために上海に行こうとするが、ブルースに頼まれ、北京に残留したという経緯もあった。1865年12月にオールコックが公

使に着任すると、翌 1866 年 11 月、ついに念願の言語研究計画を實行するために北京を離れることになり、その結果、『語言自邇集』(Colloquial Series) と『文件自邇集』(Documentary Series) の *Tzū-erh-chi* 二部作を 1867 年に出版することができた。外務省はその功績を評價し、繼續して事に當たるとともに指示。ウェイドは上海に 1867 年 12 月まで留まり、ついで一年間の休暇を得て英國に歸ることになる。1869 年の末に、中國に戻り、71 年にはついに全權公使の地位に就いた。83 年に退職歸國、88 年にはケンブリッジの初代中國語教授に迎えられ、95 年にその生涯を終えた⁵。

ウェイドが外交官として中國で働いた 40 年の歳月は、南京條約(1842)、天津條約(1858)、北京條約(1860)、總理衙門の設置(1861)、『萬國公法』の刊行(1864、アメリカ人宣教師 W.A.P. マーティン(丁韞良)による中国語訳。底本はおそらく 1855 年の第 6 版)などを節目とし、さまざまな紆餘曲折を経ながらも、中國が次第に國際舞臺上に、その平等な一員として姿を表わすことを餘儀なくされていく、そういった時代でもあった。北京官話の規範としての確立は、實はこの經緯と深く関わっている。近代國家にとって、國語は國家の自立と他國に對する獨立のシンボルである。ウェイドが『語言自邇集』の中で取り上げた北京官話は、そうした國際的な世界の中で將來中國の國語として立つべき言語の規範を否應なく先取りしていたのである。

三、『語言自邇集』への道

1867 年に刊行された『語言自邇集』は、本來ウェイドがイギリスの中國外交團における通譯教育システムを改革する一環として編集されたものだが、その後、イギリスのみならず諸外國における中國語學習の方向を決定づける役割を果たした。「北京語こそが公的な通譯官の學ぶべき方言である。北京に研修生を伴った外國公館が設置されて以後は、他の方言が優先されるということはほぼ不可能となった」とウェイドは高らかに宣言する⁶。北京語は外交舞臺における中國公用語として、確固たる地位を占めていくことになる。國語への階梯は、中國の内側からではなく、まず外側から規定されたのである。『語言自邇集』は、1888 年、W.C.Hillier により第二版が出版され、1903 年には第三版が出るなど、版を重ねた。日本でも翻刻や抄出本が出版され、明治期の中國語教育に大きな影響を與えている⁷。

しかし『語言自邇集』は一日にして成ったのではない。ウェイドはこの書物の刊行に至るまで、すでに二十數年もの間、中國語教育システムの腹案を練っていたのであり、すでに幾つかの試みを世に問うている。『語言自邇集』の巨大な成功の影に隠れて、ややもすればこれらが等閑に付される嫌いがあ

⁵以上、ウェイドの外交官としての閱歷については、James C. Cooley, Jr., *T.F. Wade in China, Pioneer in Global Diplomacy 1842-1882*, Leiden, 1981 の記述に負うところが大きい。

⁶『語言自邇集』序文、vi.

⁷六角恆廣『中國語書誌』、1994、東京、不二出版、p.30-32, 37-38 を参照。

るが、『自邇集』に至るウェイドの努力の過程を追跡しておくことは、ウェイドの脳中にあった北京官話の実態を知る上でも不可欠な作業である。

上でも見たように、ウェイドは1859年、香港において『尋津録』(*The Hsin Ching Lu, or Book of Experiments; being the First of a Series of Contribution to the Study of Chinese*)を出版している⁸。『尋津録』とは、書名から示唆されるように、(北京官話への)「渡し場を求める」といった意味合いを込めたものだが、また「新京路」(北京に向かう新しい道)の洒落でもあったという⁹。ウェイドを含めた、当時のイギリス外交官の、北京への思いの深さを物語るエピソードといえよう。『尋津録』の構成は次のようになっている。(1)は「天類」(*The Category of T'ien*)と名付けられた中国語原文(*Chinese Text*)で、中国の民間類書の冒頭部に取材して¹⁰、その内容を北京語で書いたもの、(2)は「聖諭廣訓」(*Shêng Yü Kwang Hsün; or, Amplification of the Sacred Edict*)で、雍正御製の第一章をパラフレーズしたもの、(3)の *Exercises in the Tones of the Peking Dialect* は聲調練習のための単文、から成っている。序文の最初に「本書を用いて中国語を学習する者は、英語のテキストを一冊に、また中国語のそれを第二冊として、さらに北京語音節表を第三冊として、三分冊に製本することを薦める」というように、中国語テキストと、英語の解説部分とを別にして、学習者の便をはかるという『自邇集』のスタイルは、すでにこの『尋津録』において見られる。また後世『自邇集』の影響によって中国語ローマ字標記の世界標準となる音標システムもすでに本書において確立されている。これらの基礎となる材料は、おそらく前述の應龍田によって準備されたものと思われる。残念ながらこの人物についてはほとんど何も分からないが、ウェイドの著作中に散見する断片的な情報によれば、直隸の人で、生まれ育ちが北京であったことは分かる¹¹。もちろん、この著作はウェイドが計画する中国語のシステムチックな教本の過渡的な試みとして出版されたものに過ぎず¹²、とくに中国語の例文があまりにも貧弱なものに止まっていたことは、教本としては明らかに不十分であった。北京語教科書の最初の試みとして野心的なものではあったが、大きな成功には結びつかなかった。そのためあって、今日、この書物はすでに非常に稀覯書になっている。

中国語教師、應龍田はウェイドのためにかなり多くの北京語教材を作ったと見られる。その多くは既成の材料を用いたものだが、時にはかなり自由に書き改めたりもしている。それらの言語教材をウェイドは一種の試行本のかたちで出版している。『尋津録』刊行の翌年、上海で出された『問答篇』『登

⁸ 尋、津の二字の音が、今日の標準音と異なることに疑問を挟む向きもあるかも知れないが、ともに当時の京音である。王璞『京音字彙』を参照。

⁹ Herbert A. Giles, *A Glossary of reference on Subjects connected with the Far East*, London, 1900 (3rd ed.), p.126.

¹⁰ 遺憾ながら、その類書が具体的に何であったかは現在のところ不明である。

¹¹ “A good native scholar, born and bred in the capital” (『尋津録』序文); “a fairly educated Pekingese and an admiral speaker” (『自邇集』第二版序文) など。

¹² 『尋津録』序文の開頭に言う: “The Hsin Ching Lu, or *Writing of one in search of a Ford*, as its name will shew, is not so much a guide-book as the composition of a man still in quest of the right way”.

瀛篇』の二種がそれである。『登瀛篇』については未見なので、いま『問答篇』について言えば、大判の綾装本で、漢文による序文が付いている。その後半に曰く「予、命ヲ奉ジテ中土ニ來タリ、職、教習繙譯ノ事務ヲ兼ヌ。因リテ應君龍田ト官話ヲ以テ設ケテ問答ヲ爲クリ、之レヲ篇ニ筆ニシ、マタ登瀛篇ヲ爲クル。是ノニ編タルヤ、誠ニ後學ノ舌人翻譯ノ嚆矢ナリ。刊、上海ノ官舎ニ成ル。因リテ其ノ首ニ書ス。降生一千八百六十年四月初七日、英國威妥瑪序」。このように應龍田の名前が明記されている。この二書をウェイドは正規の出版とは考えていなかった可能性が高い。恐らくは将来出版されるであろう、本格的な北京語教本（それは後に『語言自邇集』として實現する）の材料を、とりあえず少し試してみようという程度のものであったと思われる。事實、これらの材料は、多少の變更訂正を経て、そっくり『語言自邇集』に取り入れられている¹³。

さて以上のように、59、60年と矢継ぎ早に年來の教本作成プログラムを實行に移しつつあったウェイドであるが、1861年の初めから1866年11月まで、ほぼ6年に近いあいだ北京において中國の大官との應酬に明け暮れ、教本の編纂はほとんど進捗しない状況であった。長年にわたる努力が『語言自邇集』として最後の結實を見るのは1867年のことである。この書物は、最初の『尋津録』と比べると、さすがに遙かに豊富な内容になっている。全書は八つの部分から成り、それぞれ(I)Pronunciation (發音); (II)The Radicals (漢字の部首); (III)The Forty Exercises 散語四十章; (IV)The Ten Dialogues 問答十章; (V)The Eighteen Section 續散語十八章; (VI)The Hundred Lessons 談論篇百章; (VII)The Tone Exercises (聲調練習); (VIII)The Chapter on the Parts of Speech 言語例畧、である。出版書肆はロンドンの Trübner & Co. で、クォールト三冊の巨編である。さて、この八つの部分の中で、(V)の續散語十八章が『登瀛篇』を、(VI)の談論篇百章が『問答篇』を承けていることは、上にも少し触れた。1888年の第二版では、この内、續散語十八章が姿を消して、談論篇が Part V の位置を占め、Part VI には新たに踐約傳が加えられている。踐約傳は英譯名を the Graduate's Wooing としてあるように、「西廂記」を題材にして、北京語に移したもので、滿州人の學者 Yü Tzū-pin (漢字未詳) の手になるものという¹⁴。全體を見ると、結局『語言自邇集』の中で、最も中心になっているのは「談論篇」であると思われる。これは『自邇集』各版を通じて変わらず用いられ、もっとも大きな分量を占めている部分でもある。

「談論篇」百章は、繰り返すように『問答篇』に由来するのだが、應龍田がウェイドのために、この材料を用意したとき、實は滿州語會話教本である『清文指要』(*Manju gisun-i oyonggo jorin-i bithe*) の漢語部分を利用し

¹³ 『登瀛篇』は、上述のように、現在見る事が出来ないのだが、その内容はどうも『自邇集』初版本の Part V に当たる「續散語十八章」であつたらしい。『自邇集』初版の序文に、この「續散語十八章」の成り立ちを説明して、「ここに含まれる文章はずっと以前に應龍田の書いた、より大きな短文集の一部であつて、その中國語原文に私自身の手になるものを若干付け加えて1860年に出版したことがある」と言っているからである。

¹⁴ 第二版序文、vii.

ているのである。ウェイド自身は『清文指要』を二部まで所蔵している¹⁵、このことを知らなかった筈はないが、その事実については言及していない。『清文指要』は乾隆以降¹⁶、かなり広く用いられた満州語教本であるが、それ自身はまた先行する會話教本 *Tangū meyen* (一百條) にさかのぼる¹⁷。ただし後者には、漢語による僅かな語注が付けられてある程度で、前者に見られるまとまった中國語の會話文は存在しない。しかし、北京語教本のための例文として、満州語の會話教本から取材したという事実は、きわめて興味深いと言わねばならないだろう。もちろん『清文指要』から『問答篇』、さらに『語言自邇集』へと再利用されていく過程で、順序に入れ替えがなされ、表現にも変更が加えられていることは事実で、北京語を純化して行こうという姿勢がうかがえる。その變更過程を細かく検証することが望まれるが、紙幅の関係もあり小文では詳しくは觸れ得ない。¹⁸)

四、『語言自邇集』の言語

それまで確實な北京語の教本は全く存在しなかったのだから、ウェイドが材料の選擇に苦慮したことは十分に想像できる。その多くを應龍田に依存せねばならなかったのもまたやむを得ない。しかしその核心部分が満州語教本『清文指要』を襲っているということは、ウェイドの頭にあった北京語を考える上でやはり重要である。メレンドルフはその『満州語文法』で、『語言自邇集』の談論篇に言及し、「これらの問答の中國語を比較することで(談論篇と清文指要の中國語の比較—筆者) 北京語の特徴の幾つかは一般の「官話」には見られない満州的語法 (Manchuisms) であるという興味深い事実が指摘できる」と述べている¹⁹。これは些か性急な議論ではあるが、一面ウェイドにおける北京語の性格を物語るものでもある。ウェイドにはどうも、自らが意識すると否とに關わらず、極力、舊來のいわゆる「官話」から遠ざかろうとしたという傾向が見受けられる。「中國における北京語の位置は、フランスにおけるパリのサロンの言語である。北京語が帝國の標準語を墮落させるであろうと、モリソン博士が預言してから 40 年になるが、我々はいま敢えてその預言が大きく實現しているのだと言いたい。」ウェイドが『尋津録』の序文でこのようにいう時、誰しも彼が北京語へ一方的に肩入れしているという印象を否定しがたいであろう。端的に言えば、ウェイドは「官話」ではなく「京

¹⁵Herbert A. Giles, *A Catalogue of the Wade Collection of Chinese and Manchu Books in the Library of the University of Cambridge*, Cambridge, 1898, G 220, G 245.

¹⁶上記ウェイド文庫中、G 245 の一本は、目録によれば 1709 年 (康熙四十八年) となっているが、恐らく 1809 年 (嘉慶十四年) の誤りであろう。この年の版は目録類に頻見する。

¹⁷この事実は、満文書の解題や目録の多くに指摘がある。最も古くは P.G. von Möllendorff, *Essay on Manchu Literature*, *Journal of the China Branch of the Royal Asiatic Society*, n.s. XXIV (1890), p.10.

¹⁸シンポジウム当日に「問答篇自邇集談論篇清文指要章節對照表」を配布したが、ここには載せない。いずれ何らかのかたちで公表できれば幸いに思う。

¹⁹P.G. von Möllendorff, *A Manchu Grammar, with analysed texts*, Shanghai, 1892, p.14.

話」を取ったのである。もちろんこうした態度はウェイドの長年の中國滞在の経験から導き出された決断であり、相應の裏付けを持っている。ただ外交官としての彼の言語環境はあまりにも「京話」に近かったというべきである。とりわけ北京駐在以降のウェイドの交渉相手は、旗人や宗室であったであろうから、これはなおさらのことである。

ここで、『清文指要』、『問答篇』、『自邇集』談論篇の改變を素材に少しく具體例を見てみよう。

『清文指要』の漢語部分は、それ自身が獨立したものではなく、あくまで主體である滿州語の對譯として掲げられているので、完全に口語的でない部分が見られる。例えば「今日」「昨日」「前日」などは、『問答篇』、「談論篇」では、すべて「今兒」「昨兒」「前兒」に改められているし、「我們兩個人」は「我們倆」に變えられている。また「古時」を「古時候兒」にするなど兒化した表現に取り替えてあるものが多い。さらに「阿哥」のように明らかな旗人語は、『問答篇』では多く「阿哥」に、「談論篇」ではそれをさらに「兄台」に改めている。『問答篇』では若干「阿哥」が残っている場合があるが、「談論篇」ではそれも注意深く改めている²⁰。こういった改變は、出来る限り當時の北京の實際の口語に近づけようとする努力の現れであることはいうまでもない。そうした中で『語言自邇集』の言語が「京話」そのものである象徴的な表現が存在するので、それを取り上げよう。それは代名詞「你納」である。これは一般に今日の「您」の前身と考えられているが、清末の中國では「京話」の特徴として廣く認められていたものである。

吳趸人の小説『二十年目睹之怪現狀』では、「你儂」と書かれ、もっぱら北京人の登場人物のセリフに使っている。たとえば、その第72回で「你儂來了²¹！久違了！你儂一向好！里邊請坐！」と言うのは、琉璃廠の松竹齋紙店の手代であり、第75回の「你儂是大量的、想來也不怪我懶」、「你儂瞧、這就是方才那個客送我們老中堂的贄兒」、「我見天底下就是你儂最闊」等々は北京の錢舖の主人憚洞仙のことば、第103回の「你儂不大到京里來、怨不得你儂不知道」も同じく憚洞仙である²²。京話の雰圍氣を出そうとする作者の意圖はきわめて明かである。

その「你納」が、『問答篇』や『自邇集』「談論篇」ではしばしば用いられる。『清文指要』にはこの全く現れていないし、「您」もない。一方、『問答篇』には「您」は用いられないが、『自邇集』には見えている。「你納」と「您」の関係について、『自邇集』では「您 *nin* は、より普通には你納 *ni-na* と發音され

²⁰例えば第20章の「那個阿哥、是咱們舊街坊啊」(『問答篇』)、「那個人哪、是咱們舊街坊」(『談論篇』)。

²¹この箇所、吳趸人の原注に「你儂、京師土語、尊稱人也。發音時唯用一儂字、你字之音、蓋藏而不露者。或曰：‘你老人家’四字之轉音也、理或然歟」とある。「您」の成立に関してきわめて注目すべき注記であるが、主題から逸れる嫌いがあるので今はその存在だけを指摘しておく。

²²手近の1978年人民文學出版社張友鶴校注本(初版1959年)による。そのp.577, 604-605, 846を見よ。ちなみに『二十年目睹之怪現狀』は、最初、光緒二十九年(1903)八月の『新小説』第8號から連載開始、翌年の第24號までに45回が發表され、全回が出版されるのは上海の廣智書局排印本(1906-10)であるという。上の張友鶴校注本もこの廣智書局本を底本としている。

る。後者はまた你老人家 *ni lao jên-chia* の短縮形である」と説明する²³。ウェイドの時代には、まだ一音節になりきっていなかったようだ。

「你納」という表記は、恐らく應龍田の発明で、『自邇集』独特のものと思われるが、『自邇集』が流行するにつれて、これを採用する書物が他にも現れている²⁴。そのことで気になるのは『語言問答』という書物の存在である。小型の綾装一冊本で、52葉+35葉、刊年、刊行地とも一切不明である。その内容は、前半が書名と同じ「語言問答」、後半が「續散語十八章」となっている。この書の中には「你納」が頻見し、かつ後半の「續散語十八章」は『自邇集』初版の Part V. The Eighteen Section 續散語十八章と完全に一致するのである。これは一體どういうことであろうか。「談論篇」の素材を『清文指要』に求めたのと同じく、「續散語十八章」も應龍田が本書から借用したのであろうか。しかし、それにしてもは題名、内容とも一致しすぎるのがうまく説明できない。おそらくこの書物は、注13で觸れた「ずっと以前に應龍田の書いたより大きな短文集」なのだと考えられる。したがって前半部の「語言問答」は遂に『自邇集』に含まれることのなかった、準備段階の数多くの資料の一つということになる。ただし本書は『問答篇』や『登瀛篇』のように、ウェイドが出版したものではない。またウェイド文庫の中にも存在しない。これも一種の謎であるが、あるいは應龍田自身がウェイドとは無関係に刊行したのかも知れない²⁵。

五、『語言自邇集』の評価とその後

『語言自邇集』が取り上げたのは、ほぼ紛れなく、いわゆる「京話」であった。ウェイド自身もそれを目指した節がある。それでは、小文の最初に挙げた「北の官話」と「京話」との関係はどうであろうか。

趙元任はその自傳の中で「小さい頃、話していたのは一種の北方語で、古い言い方では官話ということになる。我々の家には本當の京話を喋るものはいなかった」といい²⁶、また「我々より年輩の人が話すときには必ず少しは南方のなまりがあって、特に入聲字は改め難いものがあった」ともいっている²⁷。

²³ Key to the Tzù Erh Chi, p. 53. (同様の説明が p.96 にもある)。注 20 の吳研人の解釋とも一致する。敬意を表わす「您」が「你老人家」の短縮形であるというのは、今日の學界でも定説になりつつある。池田武雄「『您』の來源、『中國語學』80 (1958.11) p.3-7,17。呂叔湘『近代漢語指代詞』1985、上海、p.36ff。

²⁴ 管見に入ったものを挙げておくと、Camille Imbault-Huart, *Manuel de la langue chinoise parlée à l'usage des français*, Pékin, 1885, p. 23. Id., *Cours éclectique graduel et pratique de langue chinoise parlée*, 4 tomes, Pékin, 1887-1889, tome I, p. 78, 98 etc. A. Vissière, *Première leçon de chinois, langue mandarine de Pékin*, Leide, 1928 (初版は 1909), p. 61, 113. Maurice Courant, *La langue chinoise parlée, grammaire du kwan-hwa septentrional*, Paris/Lyon, 1914, p.223がある。恐らく他にもその例は多いに違いないが、上記の著者はすべてフランス人であり、ウェイドと同じく外交官として中國に滞在したことのある人々であったことは注意される。

²⁵ いずれにせよ非常に珍しい書物であり、北京語資料としても無価値とも思えないので、機會を得て景印刊行したいと考えている。

²⁶ 『趙元任早年自傳』1984、臺北、p.26。

²⁷ 同上、pp.18-19。

趙元任は自分で「一種の北方語」と「京話」に注釋を加え、前者は Guanhuah “official language”, hence the English translation “Mandarin”, recently spoken of as Gwoyeu, “National Language” and Puutonghuah “Ordinary Speech” とし、後者は Jinghuah “Capital Speech”, better known, subsequently, as Beijing-huah or Beiipyng-huah とする²⁸。これは世紀の変わり目頃の話であるが、趙元任の理解に従えば、その頃、南方出身の官員はやはり一種の官話を用いていたのであって、北京語（京話）そのものはウェイドの言うほどには廣まっていなかったし、ウェイドのいうような北京語を使えというのも南方人にはそもそも無理な話でもあった。しかし趙元任の描く圖式、官話 國語 普通話、は恐らくそうではあるまい。むしろ京話 國語 普通話なのであって、近代中國の顔としての言語は、一旦、北京語が規範としての地位を確立するという過程が存在しなければならなかった。それを敏感に感じ取って積極的な主張を展開したのがウェイドだと言ってもよい。しかし北京語を唯一の規範として主張するウェイドの主張は、決してすぐに受け入れられたわけではない。歐米の學者の中でも反対するものは多かった。とりわけ五聲體系の放棄は不評であり、當時の老大家ウィリアムズもこれには絶対反対であったといい²⁹、アンリ・コルディエも後年ウェイドの追悼文の中で「(語言自邇集は) 北京語を廣めるのに他の如何なる書物よりも貢献した。私は、南京で話される言葉をさしおいて北京語を用いることに大反対ではあるが、全體としていえばこの書は中國語の認知に大いに貢献したのである」というような発言をしている³⁰。

民國が成立してのち、國音の標準問題で、おなじ五聲體系を巡って喧喧諤諤たる議論が繰り広げられることになるが、實はそのころにはすでに北京語の勝利は國際的には決定されていたのである。言語そのものの變化と發展はもとより自律的なものであるが、社會の諸關係の中に占める言語の地位は、時代や各種條件によって位置づけられる。とりわけ近代においては廣い意味での外交、すわなち國際關係が決定的な力を發揮する。もちろん變化を人々が感得するには長い時間が必要であって、中國における言語規範が南京から北京に移動するにも、明代以來數百年の時間がかかっている。ウェイドの『語言自邇集』の出現は、その規範變化の成立點に立っているのである。

²⁸Chao Yuanren, *Sayable Chinese*, Vol. I, p.62.

²⁹第二版序文、p. ix.

³⁰Thomas Francis Wade (Nécrologie), *T'oung-Pao*, 1895, p.410.

(追記) 小文はシンポジウムに提出した原稿に若干の手を入れたものであるが、論旨等、基本部分には変更を加えていない。当日コメンテーターとして論評された木津祐子氏をはじめ、言語班の発表者各氏、さらに席上あるいはシンポジウム終了後、貴重な意見を頂戴した Marianne Bastid=Brugière、平田昌司、齋藤希史各氏に感謝したい。